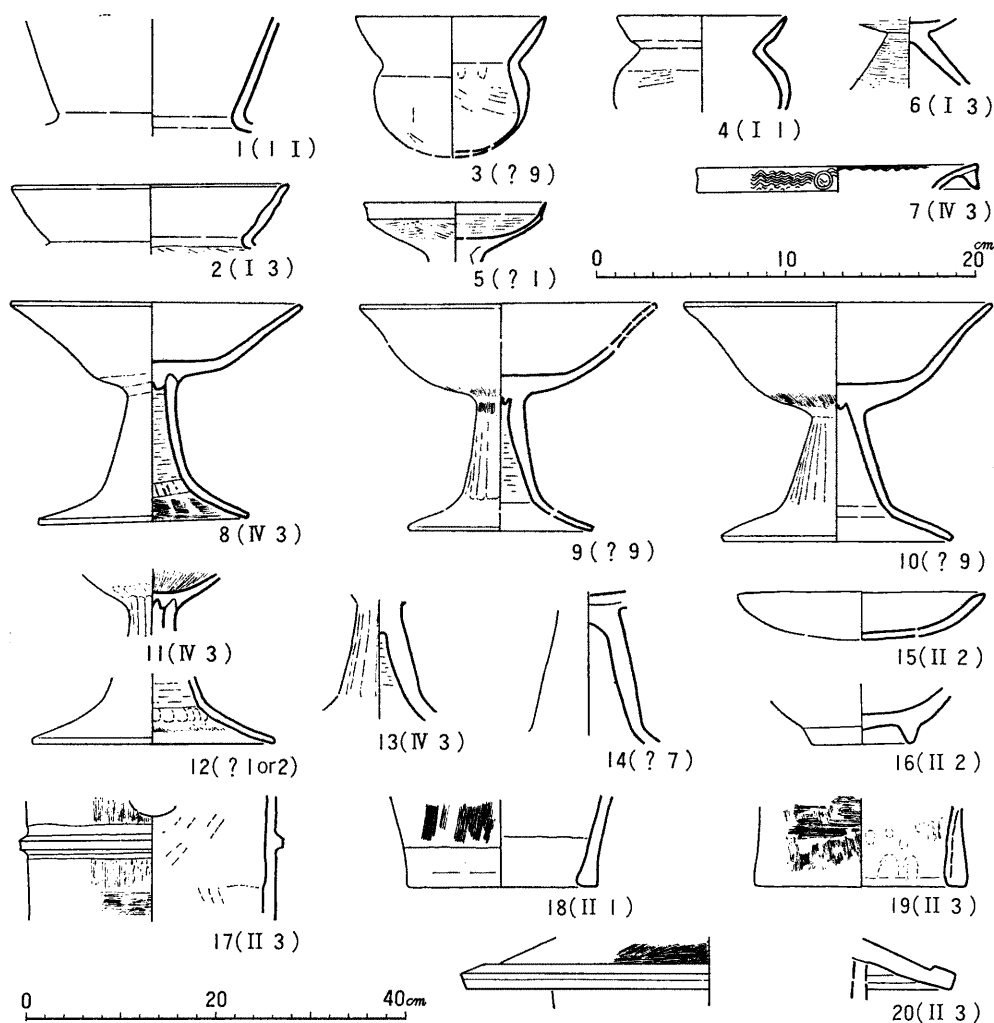




第31図 崇神天皇陵ろ号陪冢の出土品（縮尺1/4 ただし17～20は1/8 カッコ内のローマ数字は層位、算用数字はトレンチまたは地点）

外反する口縁部をもつ坏部に、内面横ヘラ削り外面縦ヘラ削りの直線的な筒部から丸く屈曲して大きく外に開く裾部をもつ脚部を挿入してホゾで接合する高坏（8～12）などは新しい様相を示す。中近世の土師器（15）本誌前号紹介の景行天皇陵出土品と全く同工の大型の鉢や灯明皿（15）など赤土器白土器である。

磁器（16） 削出し高台を付した碗。

埴輪（17～20） 横方向のハケ目の埴輪円筒部片が多く、黄褐色で焼成の甘いもの、赤褐色で硬質のものに限られる。20は、蓋の笠部、蓋のヒレ飾りの十字形部もある。（笠野 毅）

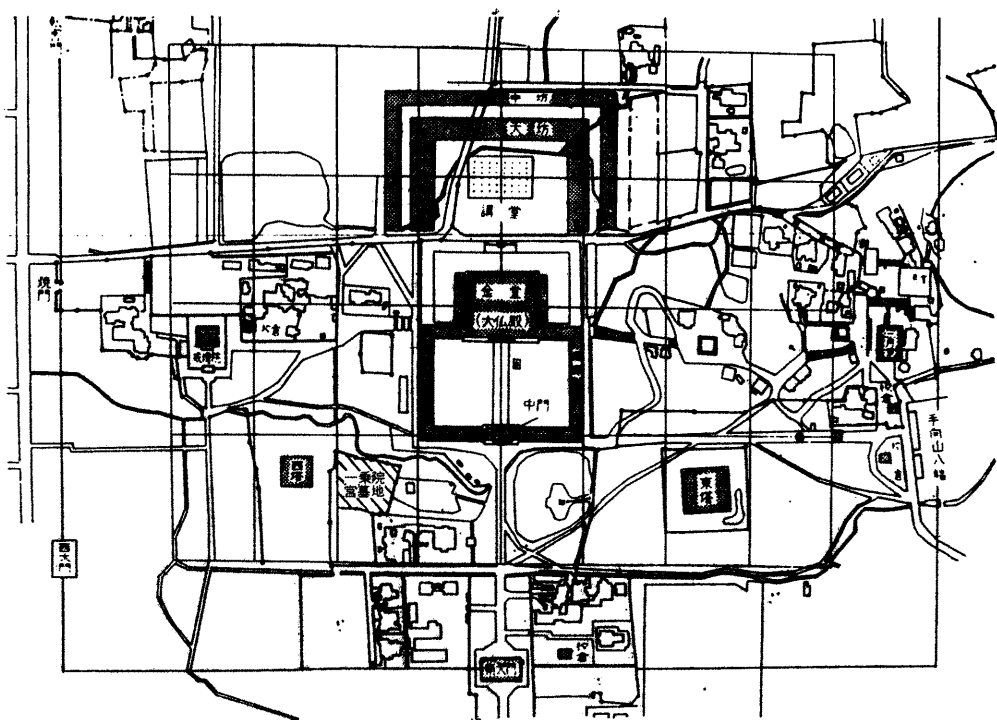
## 七 奈良一乗院宮墓地の外構柵設置予定箇所調査

当一乗院宮墓地は、真言院の旧境内で、周囲は史跡東大寺旧境内に指定されている。外柵フェンスの設置予定箇所は、十三重石塔敷地に接する墓地東側の北半と、小川を距てて東大寺大仏殿廻廊と対する北側及び、東大寺西塔跡地と境を接する西側境界線の北半で（第32図）、東大寺の遺構が存

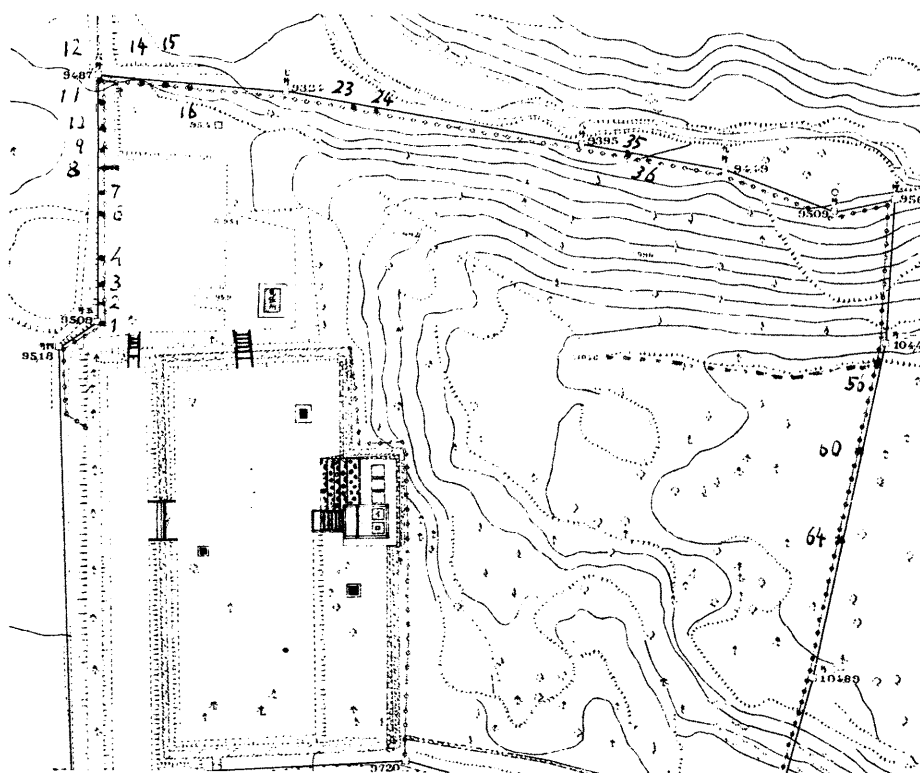
在する可能性もあるので、昭和五十年三月二十八日から三十一日までフ  
ェンスの柱穴予定箇所の事前調査を実施した。

調査は、各境界線石標間を一・八メートル前後に等分した柱穴予定箇  
所に、西側境界の南より順に番号をつけ（第33図）、西側は、西塔廻廊  
基壇の存在する可能性があるという奈良県教育委員会文化財保存課の指  
摘があるので、一〇一二号のうち現欄柱と一致する五号を除いた全部、  
北側は古瓦の散布を見る一四〇一六、二二三、二四、三五、三六の各号、  
東側は同じく五六、六〇、六四の各号について、方五〇センチ、深さ約  
六〇センチの柱穴範囲の発掘を実施した。

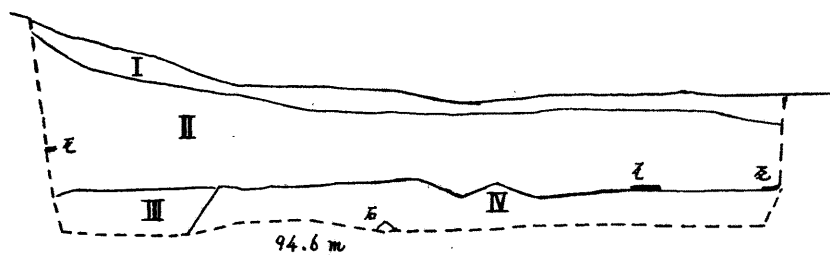
西側は十一箇所共黒灰色の表土の下に、小礫を含んだ灰褐色の砂質土  
層があつて、両層共に瓦、土師器等の破片を多量に包含する。六・七・  
八・九・一一の各号では、この下に黄褐色の砂まじりの粘質土層があつ  
て、焼瓦を交える多量の瓦、土師器の破片を包含し、九号では西側に瓦が  
累積していた。またこの層から漆喰の小片が相当量検出された。一〇号  
では北半部二層目の中間に、遺物を全く包含しない、厚さ三〇センチ程  
の軟かな黄土層を北下りに嚙でいた。八号穴を東側へ一・五メートル拡  
張した結果、二層目の灰褐色土の下が、固い粘質の黄土層になっていて、  
これを八号穴東側で西塔側を切り下げていることが判明したが、西塔遺  
構と関連があるか否かは不明である。このほか西側発掘区では四箇所  
で第二層目〜三層目に掘込んだ径一〇センチ程の円孔を検出したが、い  
ずれも当墓地外周の旧木柵の柱穴と推定される。



第32図 一乗院宮墓地位置図（石田茂作著「正倉院と東大寺」による）



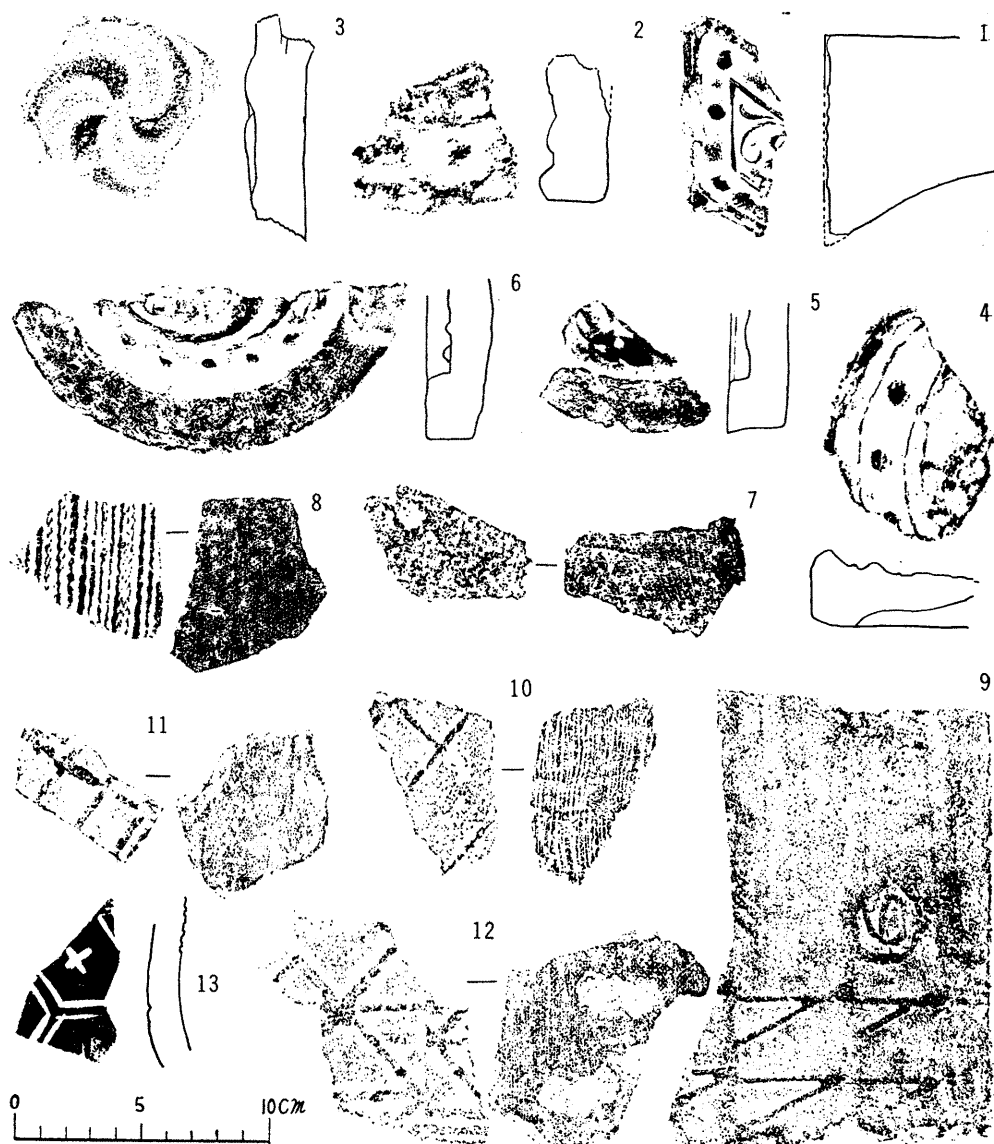
第 33 図 一乗院宮墓地調査箇所位置図 (縮尺 600 分の 1)



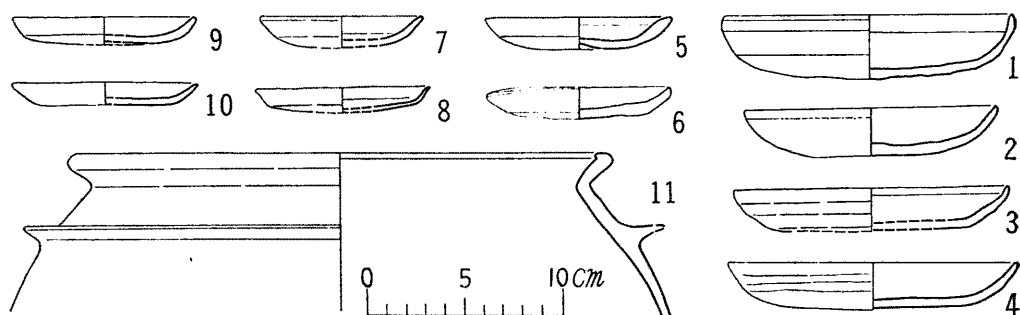
第 34 図 一乗院宮墓地 8 号柱穴北壁地層図 (縮尺 20 分の 1)

北側の一四～一六号は、川沿傾斜地で一四号は黒灰色表土、砂礫交り褐色粘性土、一五号は黒灰色表土、砂礫交り灰色粘性土、灰色砂質粘土、一六号は砂交り褐色土、黄褐色砂質土の各層に分かれ一六号の下層以外はいずれも土器片、瓦片を包含する。川縁の二三、二四、三五、三六各号は三、四層の堆積層からなり、各層多数の瓦片を包含し、土器片も交える。三五号三六号の下層は砂礫層で、河床堆積物の様で、隣接の川が埋ったらしい。

東側の五六号は北側の谷の肩に位置し、黒褐色表土下の黄褐色粘質土から石組を検出した。(第 37 図) こ



第 35 図 一乗院宮墓地出土品拓本（縮尺 3 分の 1）1～12 古瓦 13 瓦器



第 36 図 一乗院宮墓地出土品復原図（縮尺 4 分の 1）  
1～4, 9, 10 赤土器師 5～7, 11 白土器師 8 瓦器



第 37 図 一乗院宮墓地出土築地基礎遺構

の石組は、二〇～三〇センチ大の河石を約七〇センチの間隔を置いて二例に積み上げたもので、その間に布目瓦が重なって出土した。石組は東西に走り、西方で一部露出して連続している（第33図破線部分）。この区間には漆喰片が連続して認められるので、これは幅約七〇センチの築地基礎と考えられる。六〇号は五六号と同様な土相であるが、遺物は少数の土師器片のみであり、六四号は前者と同じ地層の下方に、地山らしい風化礫を含む粘土層があつて、各層共出土遺物がない。

本調査の採集遺物は、古瓦、土師器、瓦器、須恵器、陶磁器、鉄製品等の破片合計三五〇〇点で、発掘面積に比して著しく多く、未だ整理が完了しないので、出土層位と年代関係など判明しないが、瓦は奈良時代字瓦、鎧瓦、布目瓦、鎌倉時代鎧瓦、布目瓦、室町時代鎧瓦、江戸時代以降の瓦などがあり、布目瓦の数が最も多い。土師器は殆んどが大皿、小皿の類で、瓦器は碗の破片が多い、遺物の一部の拓本と実測図を第35図と第36図に示した。

以上の調査結果のように、八号柱穴の地盤切込痕・九号の瓦果積部など西塔との関連が疑われる部分もあったが、柱埋設でこれらを破壊することはないので、フェンス柱の埋設工事は、築地基礎の箇所を避け、遺物に留意して実施すれば支障はないと思う。

（石田 茂輔）